

1次診療病院における 下痢治療の現状

—アンケート調査に基づく一般的治療法の紹介—

ACプラザ荻谷動物病院

葛西橋通り病院 白井活光

明治通り病院

荻谷和廣



Kazuaki Shirai, DVM, Ph.D.

ACプラザ荻谷動物病院
院西橋通り病院 院長。日本臨床獣医学
日本臨床獣医学フォーラム理事。日本大学卒業後、日本獣
野大大学院にて免疫学分
野で博士号取得。98年に
ACプラザ荻谷動物病院
入社。01年より三ツ目通
り病院院長。09年8月より
葛西橋通り病院院長を兼
任したのち、10年4月より
現職。



Kazuhiro Kariya, DVM, Ph.D.

ACプラザ荻谷動物病院
院代表。明治通り病院
院長。日本臨床獣医学
フォーラム名譽会員。日
本大学を卒業後、日本獣
野大大学院にて免疫学分
野で博士号取得。74年に
ACプラザ荻谷動物病院
学博士号取得。74年に
り病院院長。09年8月より
葛西橋通り病院院長を兼
任したのち、10年4月より
現職。

Key Points

- ①動物用止瀉剤は、単純性下痢以外の重篤な疾病のスクリーニングに役立つ。また、調剤不要であり、飼い主も与えやすく利便性が高いため、下痢治療では多く選択された。
- ②下痢治療には、ペルベリン、ピスマス、ゲンノシヨウコ、抗コリン剤、乳酸菌などを選択する割合が多かった。
- ③下痢治療には、苦みが強いものや他の薬剤と拮抗するものがあり、その配合には注意や適量の見極めが必要である。

はじめに

下痢では排便回数が増え、流動性の便となることが多く、飼い主は散歩時や家の中の糞便回収に困難を伴うため、早い改善が望まれる。特に子犬は下痢の発症頻度が高く、ブリーダーや生体販売を行うペットショップでは下痢に対する関心が高い。一年を通して下痢を理由に来院する患者は多く、それは当院においても例外ではない。

下痢は、寄生虫や細菌による感染性下痢、毒物や異物の摂取、食事やストレスなどによる下痢のほか、内分泌疾患や肝疾患、腫瘍など全身性疾患の一症状としても発症している。時間の経過とともに自然治癒する下痢も多いが、重篤な疾病の一症状でもあるので、薬物投与や食事療法の対症治療を行いつつながら状態を安定

させ、下痢の原因治療を行うことが重要である。

止瀉剤や整腸剤は古くから存在しており、人用は薬局やドラッグストアで簡単に入手することができ、動物用もいくつつか市販されているが、動物病院では必ずしも動物用医薬品を使用しているとは限らないようである。頻繁に遭遇する下痢に対し、我々のような1次診療機関ではどのような治療が行われているのだろうか？ あまりにもよくある症例なので、対処法がマニュアル化されている病院が多いのではないだろうか？ このような疑問から、下痢治療に対するアンケート調査を行った。この調査により、下痢治療を改めて考えるよい機会となれば幸いである。

アンケート調査

アンケート調査は11府県15動物病院で2006年と2011年の2回行い、下痢治療に使用する薬剤（剤型や薬物名）について調査した。その結果、主に内服薬を処方するケースは2006年、2011年ともそれぞれ80%および93%と高く、内服薬を処方せずに絶食もしくは食事指導のみ行うケースは2011年で7%、2006年の20%と比較して減少傾向であった（絶食指導を行いつつながら内服薬を処方する場合は「内服薬処方」に含めた。図1・2）。また、絶食指導を止めた理由について表1にまとめた。使用している内服薬のうち、動物用止瀉剤を使用している割合は2011年で67%であり、2006年の47%と比較して増加傾向であった。一方、自家処方*は2011年で27%（2006年47%）、医療用止瀉剤は2011年で13%（2006年40%）であり、いずれも2006年と比較して減少していた。錠剤以外の剤型を使用する割合は増加傾